

## —医学部カリキュラム・コーディネーターの立場からみた IR の活用—

藤原佐智（大阪医科大学）

### 1. 本発表の目的と課題

大阪医科大学では、大学による教育成果ならびに学生の学修成果を可視化し、教育改善を恒常的に実施する目的で、3つのポリシーに即したアセスメントポリシーを制定した。大阪医科大学のアセスメントポリシーにおいては、(1) 医学部と看護学部、それぞれの特性を踏まえて課程レベルと科目レベルの評価指標を設定しながらも、機関レベルとして全学共通の指針として制定していること、(2) 教育の成果を可視化し、教育改善を恒常的に実施する目的で IR による分析結果を検証の際に用いていることが特徴として挙げられる。本報告では、大阪医科大学医学部における毎年の学修成果の検証が、アセスメントポリシーに基づいて、どのように行われているのか、またその際、IR にどのような分析や資料を依頼し、検証に活用しているのか、教学マネジメントを実務レベルで支えるカリキュラム・コーディネーターの立場に基づいて報告する。

### 2. 大阪医科大学における教学マネジメント体制とアセスメントポリシー

医学部と看護学部の2学部からなる私立大学の大阪医科大学では、「教育戦略会議」を頂点とした教学マネジメント体制を整備している。この体制は中央教育審議会大学分科会『教学マネジメント指針』（2020）で提示されている「教学マネジメントと指針の構造」（p.7-14）にも準じている。「教育戦略会議」には、学長、学長補佐、学部長、教育センター・学生生活支援センター・研究支援センターの各センター長、入試・広報統括責任者、アドミッション・オフィス長、中山国際医学医療交流センター長や IR 室専任教員、学務部長や研究推進課長、その他教職員など学内要職者が参画しており、教学に関する全学的な施策や方針が各学部、教育センター、大学院研究科などの各部署・組織に明確に伝わることで、トップマネジメントの決定が具体的な取り組みとして着実に実施されている。また、トップマネジメントの決定を具体的な取り組みとして実施するために、各々の学部の各部署における PDCA サイクルも適切に機能させている（図1）。各学部における教学の推進と計画的な実施の中心的な役割を担うのは教育センターである。例えば医学部の場合、医学教育センターは、センター長、副センター長、専任教員及び兼任教員、事務で構成され、学則に定める教育理念を円滑かつ継続的に実行することを目標に医学部の教育を企画・実行している状況である。

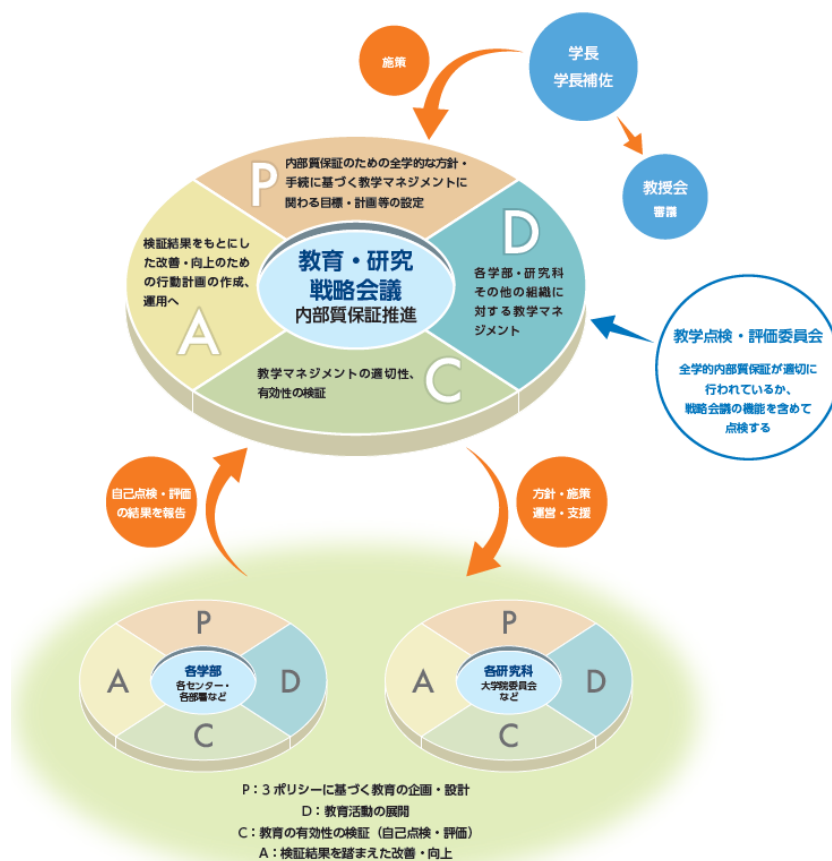


図1 大阪医科大学内部質保証と自己点検の概念図

本学では、2019年度に医学・看護両学部において、アセスメントポリシーを策定し（表1）、それに基づいたPDCAサイクルによるカリキュラム点検・評価を開始している。各々の学部特性を踏まえた、授業科目レベル、教育課程レベル、そして全学共通の指針としての機関レベル、の各レベルにおいて評価項目設定して点検・評価を行い、その結果を踏まえて、さらなる教育の充実と学習成果向上のための改善に取り組む努力を行っている。

アセスメントポリシー策定においては、両学部で何度も検討し、互いの諸会議や教育戦略会議にも何度も議題として提出して協議を重ねた（この間、筆者はカリキュラム・コーディネーターとしてアセスメントポリシーの取りまとめと会議運営の事務を担ったが、他大学の動向も参考にした）。そうしたプロセスを経ることで、各学部が学部教育の独自性を失うことなく、各学部の教育方針やカリキュラムについて相互に理解を深めつつ評価・点検の項目を制定することができた。この手間暇がかかる協議があったからこそ、全学として共通のポリシーを制定することができるとともに、各学部を尊重して協働する意識が高まったことで、各学部でしっかりとアセスメントポリシーの科目レベル、課程レベルの検証をし、「教育戦略会議」および全学で行う「教育研究集会」（FD&SD）において機関レベルの報告、検証、大学としての方向性の共有に繋がっているのではないだろうか。

|| 機関レベル (大学レベル)

	入学時	在学中	卒業時
査定観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アドミッションポリシーを満たす人材か</li> <li>・アドミッションポリシーの妥当性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カリキュラムポリシーに則った学修が進められているか</li> <li>・カリキュラムポリシーの妥当性</li> <li>・アドミッションポリシーの妥当性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディプロマポリシーを満たす人材になったか</li> <li>・ディプロマポリシーの妥当性</li> <li>・カリキュラムポリシーの妥当性</li> <li>・アドミッションポリシーの妥当性</li> </ul>
機関レベル (大学レベル)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学試験</li> <li>・入学時調査</li> <li>・入試制度評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進級率、休学率、退学率</li> <li>・学勢調査</li> <li>・正課外活動状況 (短期留学、クラブ、ボランティア等)</li> <li>・ポートフォリオ</li> </ul>	<p><b>卒業時</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業時アンケート (学勢調査)</li> <li>国家試験合格率 (医・保・助・養)</li> <li>研修先一覧 (マッチング結果：医学部)</li> <li>就職率/進学率 (看護学部)</li> </ul> <p><b>卒業後</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業生アンケート</li> <li>卒業生就職先/勤務先へのアンケート</li> </ul>

|| 医学部医学科のアセスメントポリシー

	入学時	在学中	卒業時
課程レベル (学部レベル)	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学試験</li> <li>入学時調査</li> <li>入試制度評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修得単位数</li> <li>・GPA</li> <li>・学勢調査 (カリキュラム評価・学修行動・D P到達度調査)</li> <li>・進級率、休学率、退学率</li> <li>・学年総合試験成績</li> <li>・共用試験成績</li> <li>・ポートフォリオ</li> <li>・入試制度別成績、態度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業要件：修得単位数</li> <li>・資格取得：国家試験合格率</li> <li>・GPA (通算)</li> <li>・進級率、休学率、退学率、ストレート率</li> <li>・就職率</li> <li>・学勢調査 (カリキュラム評価・学修行動・D P到達度調査)</li> <li>・入試制度別成績、態度</li> </ul>
科目レベル		<ul style="list-style-type: none"> <li>・各科目評価 (講義・演習・実習) 一出席、試験成績、レポート、ポートフォリオ、諸学アセスメントテスト成績等</li> <li>・授業評価アンケート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各科目成績 (講義・演習・実習)</li> </ul>

|| 看護学部看護学科のアセスメントポリシー

	入学時	在学中	卒業時
課程レベル (学部レベル)	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学試験</li> <li>入学時調査</li> <li>入試制度評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修得単位数</li> <li>・GPA</li> <li>・学勢調査 (カリキュラム評価・学修行動・D P到達度調査)</li> <li>・教員によるカリキュラム評価</li> <li>・進級率、休学率、退学率</li> <li>・保健師、助産師コース希望者数</li> <li>・外部試験結果 (国家試験模試等)</li> <li>・正課外活動ポートフォリオ</li> <li>・入試制度別成績、態度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業要件：修得単位数、卒業演習評価</li> <li>・資格取得：国家試験合格率</li> <li>・GPA</li> <li>・休学率、退学率</li> <li>・就職率、進学率</li> <li>・学勢調査 (カリキュラム評価・学修行動・D P到達度調査)</li> <li>・卒業時到達目標の自己評価</li> <li>・正課外活動ポートフォリオ</li> <li>・入試制度別成績、態度</li> </ul>
科目レベル		<ul style="list-style-type: none"> <li>・各科目評価 (講義・演習・実習)</li> <li>・実習ポートフォリオ</li> <li>・授業評価 (学生)</li> <li>・授業改善報告書 (教員)</li> <li>・ピアレビュー報告書 (授業見学)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各科目成績 (講義・演習・実習)</li> </ul>

表1 大阪医科大学医学部アセスメントポリシー

ここで筆者がカリキュラム・コーディネーターを務める医学部のアセスメントポリシー (表1) について、概要を説明しておきたい。「科目レベル」は、各学年のカリキュラム委員会において、年度末の進級判定成績や科目G Pの振り返り、学生からの授業評価アンケートのフィードバックなどを行い、医学教育センターへ報告する。「課程レベル」については、各学年のカリキュラム委員会からの報告をもとに、医学教育センターにおいて、学部としての成績や、進級率、学勢調査や、共用試験・総合試験等をIR室の分析を大いに役立

て議論する。また外部委員や学生を含むカリキュラム評価委員会においても検証され、次年度のそして中長期の課題へとつなげている。各学部で教授会報告後、教育戦略会議において「機関レベル」検証が行われ大学としてのこれからの課題設定する仕組みとなっている。各会議スケジュールについては表2に示すとおりである。

科目レベル	
各学年医学部カリキュラム委員会	
4月:アセスメント・ポリシーに基づく検証(前年度振り返り)	
12月:中間時点振り返り	

課程レベル	
医学教育センター会議→医学部教授会	医学部カリキュラム評価委員会
毎月実施	5月:前年度カリキュラム検証・評価
3-7月:アセスメント・ポリシーに基づく検証(前年度振り返り)	10月:特化した科目について検証(主に新カリキュラムや新規取組み)

機関レベル
教育戦略会議
毎月実施
6月:アセスメント・ポリシーに基づく検証(前年度振り返り)
11月:次年度教育課程編成に係る検証

表2 アセスメントポリシーに基づく検証会議及びスケジュール一覧

アセスメントポリシーを制定することによって、両学部ともに学習成果等の点検・評価が一層着実に行われ、特に「在学中」「卒業時」の部分における点検・評価における全学的な教学マネジメント体制は出来上がりつつある（「入学時」部分は、入試広報課とIR室が連携）。将来的には教育センターが中心となって入学時～卒業時、卒業後も併せてよりシームレスな体制を築いてゆきたい。

### 3. アセスメントポリシーにおけるIRの活用

アセスメントポリシーのとりわけ課程レベルの点検と評価においては、学部全体の点検であるため、成績や評価に関わるデータを統計的に処理して可視化することが必要となる。そのため、IR室による情報収集・分析を根拠とした客観的データが不可欠である。

分析対象となるデータは、入試選抜に始まり、国家試験結果、さらには卒業後の初期研修評価にまで及び、卒業生の意見もカリキュラム改革に反映できる仕組みとなっている。分析の結果は、前出のとおり、学部ごとのカリキュラム委員会、教育センター会議、カリキュラム評価委員会、教授会に資料として提出され、科目やカリキュラムの妥当性の評価、さらには改善・向上に向けた施策の根拠としている。

#### 【2019年度IR室による医学部データ分析例】

2019年度医学部入学試験ごとの入学後の成績分析	課程レベル
GPA分布（課程レベル「GPA」）	課程レベル
第5学年臨床実習履修評価試験の検証に向けての分析	課程レベル
第4学年共用試験CBTにみる第3学年総合試験導入前後の変化	課程レベル
学勢調査 - 学修成果部分 -	課程レベル
2019年度卒後研修医評価と卒前総合試験成績の関連	機関レベル

例えば、「学勢調査 - 学修成果部分 -」の「ディプロマポリシー項目における自己評価」については（図2）、「ディプロマポリシーとして掲げられている項目の達成度の自己評価では、ほとんどの項目において身についたとする学生の割合が全体で約7割となっており、とくに5・6年生ではその割合が約8割を占めている。身につかなかったとする学生の割合も1割程度にとどまっているため、全体として学生のディプロマポリシーに関する達成の自己評価は高いと言える。ただし、国際性に関する項目では、身についたとする学生の割合が全体で半数程度であり、まったく身につかなかったとする学生も約1割いるため課題である。」という分析結果が出た。これについては、卒業生アンケートでも同様の結果が出ている。一部の学生が海外の大学において臨床実習する機会や、海外の大学生が来日し本学学生に交じって臨床実習を受ける機会はあるものの、全員が経験できることではないため、カリキュラム上の工夫が必要である。本件については、学長の「教学方針」にも「Globalization（国際化）」を掲げられており、中山国際医学医療交流センターを中心に卒業前のシームレスな教育を通じて海外からの留学生を増やしていく中長期的な課題としている。

**外国語表現力を身につけ、海外の医療者・研究者や患者とコミュニケーションを取ることができる。**

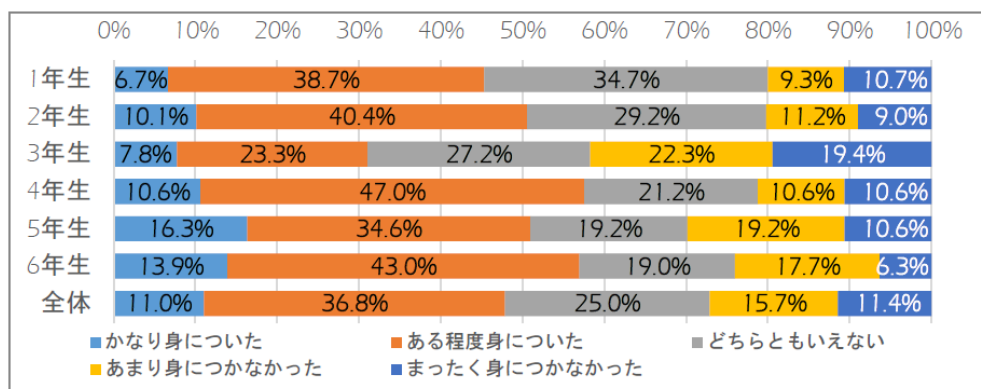


図2 「学勢調査 - 学修実態 -」より

飛躍的な結果に IR 室による分析が活かされた例もある。昨年度の研究集会で発表させていただいたが、2018 年度の IR 室による「過去 5 年間（2013 年～2017 年）の国試不合格要因の分析」結果により、本学では特に、第 3 学年以降の成績、原級留置生に注視し、学習支援、カウンセリングに力をいれていくこととなった。2019 年度は試験的に 6 年の原級留置者および成績下位者支援（「学修方法の改善点」に重点を置く）を開始したが、当該年度の第 114 回医師国家試験においては、新卒受験生が全員合格するという快挙から、成績下位者を前期から支援してきた成果が表れたと自負している。この学修支援体制については、医学教育センター会議でもほぼ毎月進捗状況が報告されており、2020 年度の支援にもつながっている。

#### 4. まとめ

2019 年度にアセスメントポリシーを策定した後、2018 年度、2019 年度とそれに基づくカリキュラム点検・評価を進めてきたが、IR 情報を利用した学修成果の検証を通じて、カ

リキュラム・コーディネーターとして2つの重要な事項に気づくことができた。

1つ目は、アセスメントポリシーの各項目について具体的な検証をすることにより、組織や会議の役割が明確になり、全学的な教学マネジメント体制が磐石化してきたことである。役割を明確にすることで、各会議の年間スケジュールもおのずと明らかになり、サイクル循環の円滑化につながっている。またスケジュールがある程度決まってくることによって、各会議間や学部間の協働にもつながり、すでに年次カリキュラム報告書を進めていた看護学部に加え、医学部でも2019年度から「アセスメントポリシーに基づいたカリキュラム評価報告書」を作成し、諸会議での検討や意見についても詳細にまとめるまでもとなり、学部間の協働があつてこそその切磋琢磨も生まれた。2つ目のポイントは、具体的な解決策をもって課題に取り組む体制ができるようになったということである。「明確な分析結果に基づいて」点検・評価を行うということは、客観的資料を共有したうえで議論するという大きな意味合いがあり、それゆえ議論が拡散しにくく、発言も活発になり、具体的な改善策が生まれることにつながっている。数値的なことだけではなく、学生の声、現場の教員の声もしっかりと把握することで、会議の内容も非常の充実したものとなり、明確な打開策が見つかるケースが多い。特に今年度のカリキュラム評価委員会では外部評価委員からも、カリキュラムに対して非常に踏み込んだ意見をいただくことができた。

「アセスメントポリシー」や「学修成果」という言葉を初めて聞いた頃は、とにかく焦りに似た気持ちから会議を回し、中身が伴っていないこともしばしばあった。しかし、アセスメントポリシーと具体的なIRによる根拠に基づいた資料により、1つ1つの会議の役割が次第に整理でき、課題についても、次年度に向けてのもの、中長期的に見ていくべきものに分けることが必要だということが分かってきた。PDCAサイクルを循環させるという事は、循環させることが重要なのではなく、次なる課題についての取り組みが明確になり、各大学の最終目的である建学の精神や、ディプロマポリシーに繋がる学生本位のカリキュラム作りの風土を構築させることなのだと考える。IR機能を活用すること、アセスメントポリシーにもとづく検証を継続していくことで、本学の内部質保証体制を磐石化していくことも、カリキュラム・コーディネーターの役割の一つだと考える。

### 【参考文献】

- [1] 中央教育審議会大学分化学会（2020）、「教学マネジメント指針」。
- [2] 大阪医科大学医学部「大阪医科大学内部質保証と自己点検の概念図」。  
([https://www.osaka-med.ac.jp/about/conceptual\\_diagram.html](https://www.osaka-med.ac.jp/about/conceptual_diagram.html))
- [3] 大阪医科大学「アセスメントポリシー」。  
([https://www.osaka-med.ac.jp/faculty/medical/assessment\\_policy.html](https://www.osaka-med.ac.jp/faculty/medical/assessment_policy.html))
- [4] 大阪医科大学医学部「学勢調査 - 学修実態 - 」。  
(<https://www.osaka-med.ac.jp/campuslife/f2pjgc000000gp7c.html>)
- [5] 細川敏幸，山田邦雅 1，宮本淳（2018）「アセスメント・ポリシーの考え方—アセスメント・ポリシー研究会報告—」，高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—，25。